

御歌

阿彌陀佛と

十聲となへて

まどろまん

永きねむりに

なりもこそすれ

目次

うらぼん禮讃……………さとう良智(2)

法然草に現われたる法然上人……………須藤隆仙(5)

尾張の圓成寺に詣でて……………大橋俊雄(10)

滯印日記(六)……………春日井眞也(19)

小説 苔……………石川忠正(22)

殉教の聖僧 金光上人(一)……………開米智鎧(14)

經典講話 阿彌陀經の理解(二)……………福富海岳(26)

三つの心

今、人に救いの道を勧める時には、どのような心がまえと、その心がまえとして、三つの心をそなえたならば、必ずみ國を救われる。三つというのは、第一に「まごころ」であつて、身で阿彌陀様を禮拜し、口でほめたゝえ、心でひたすら思つて忘れず、よく／＼み國のありさまに思いをこらす時、この三つのはたらきに、「まことの心」がこもつてゐることである。だから「まごころ」という。第二に「深い心」であつて、これは「まこと」のこもつた、信ずる心である。もと／＼、われ／＼は、多くのなやみや、わずらいを持つた、おろかな迷い人であつて、勝れた報いを受ける善行も少く、欲と物と心との三つの世界をさまよい、ちようどほのほにつゝまれた家にゐるような、苦しみの生活を續けて來たけれども、これをのがれることは、自分の力ではとうてい出來ないと信ずるのである。そして又、阿彌陀様が、たとえ十聲一聲でも、そのみ名を唱える者をば、必ずみ國を救うとお誓いになつた、大きなおぼしめしを信じ、少しも疑われないのを「深い心」というのである。第三に「ふりむけて願う心」であつて、自分の積んだすべての善をふりむけて、み國に救われたいと願うから「ふりむけて願う心」という。この三つの心をすべて持つてゐる人は、必ずみ國を救われるけれども、もしその一つでも缺けたならば、救いをいただくことが出來ない。

うらぼん禮讃



大地は緑したたり
みなぎるいのちに
自然はわきかえつてゐる。

このときに
うらぼんはやつてくる。
家々に、そして、心の底に。

はるかなる祖先の方々
なつかしいちちはは
思いにむせぶ。

さとう 良智

幼きも老いたるも
ただひとすじに
報恩のみち。

七月十五日或は月遅れはお盆だ。または夏祭りの季節だ。中元の時節だ。季節のおまつりでもあるのだ。お正月が冬のまつり。お盆とお正月が一度にきたようだ、と言われるように、日本の大切な行事であり、季節でもあるのだ。お正月は生命のひそむ時、お盆は生命の満ちあふれる時であります。この二つがもつれかさなつて、かぎりなくみいのちはのびてゆく。

さて、うらぼんの意味であるが、一應知つておくことも

必要であろう。印度の古代の言語、梵語であります。少々なまつていと言われるが、それは學者先生にまかし、わけがらは、「救倒懸」だという。お定りのむつかしい漢譯だが、「さかさまにつりさげられたように苦しいものが救われる」というわけであります。

「うらぼん經」というお經に、お釋迦さまの高弟「もくれん尊者」が、もち前の神通力で、わが母はいづこにとみられると、これはいかに、極樂においでと思つてばかり居られたのが、餓鬼道におちて、召しあがろうとするお水もごはんも、火になつてしまい、骨と皮ばかり。仰天された、もくれん尊者は、日頃御歸依されていた御師、お釋迦さまに、おなげき、おすがり申された。

お釋迦さまは、おごそかに、「それは「供養」することにまさるものはない。それも「ほとけ」と「僧伽」に供養するがよい。七月十五日がよからう。」と申された。そこでもくれん尊者はお釋迦さまが仰せられたようにされた。ところがお母さまがその功德によつて苦しみから救われた。と説かれていことに源があります。そこから、地獄、餓鬼道におちている人をお救いする爲の法要として印度・支那・日本と永く永く傳えられているのであります。季節のおまつりと一緒になつて、ひとびとの日常の生活のなかに深く沁みこんでいるのです。

日本では推古天皇の御詔書に初まり、齊明帝の時代には

寺寺、家家で盆會を行うように定められたのであります。てらでらで行われる「施餓鬼」が御先祖まつりであることがこれでわかりますが、わが家の御先祖をおまつりすることが、どのように尊いことであるかは今更申すまでもないことでしょう。家々のお先祖さまがあつたればこそ今日のわれわれがあるのです。ここで靜かに思わなければならぬことは、わが家のご先祖さまのみが尊いのではなく、いづくの家のお先祖さまも、そして、人類一般の先人達の御恩はかぎりないということです。かりに、日本のくにに過ぎつてみても、日本のくにを心のめんにも物の面にもそだて養つてきたのは尊い御先祖様達であります。そのご先祖さまをおそだてになつたのが大みいのち即ちあみださまです。釋尊がみほとけを供養せよと仰せられたのはこの意味であります。われわれは、奥深いみいのちの世界にあつては「み佛に供養され、み佛を供養し」お互にそだてられ、そだつてゆくのです。これが、往生のすがたであります。報恩感謝のすがたは、そのまま往生のすがたであります。まことにみ佛を供養したてまつるものは、先祖さまを供養したてまつるものであります。またそのものこそみ佛のみまもりを得、ご先祖さまのみもりを得るものであります。さらに「僧」に供養するものは、苦から救われるであろうと世尊は仰せられた。僧とは必ずしも今日の僧侶のみを言うものでないことはよく御存知のことと思ひます。僧とは

僧伽和合僧と申しまして、人々のあつまりです。大みをや
であります無量壽如來さまは人々のあつまりを通じてその
尊きおんすがたをあらわし給うのであります。か空に、中
ぶらりんのところにはましまさぬのであります。もちろん
十方にあまねくましまし給うけれども、もつともよく、そ
のおんすがたをあらわし給うのは、「サンガ」即ち、人々
のあつまりのなかであります。佛法には、唯、個人という
ものはありません。みな人々のまじわりのなかにのみ個人
があります。むつかしいことばでは、「縁起無我」であり
ます。それでありますから、「サンガ」を供養すことは、
人類を供養することであり、いきとしいけるもろびと
に供養し、ぬかすくことであります。人が人を供養し、ぬ
かづくところに救いがあります。平安があります。仕合せ
があります。祖師と申される数々の古の聖者達が、どのよ
うに人々を供養し、人々にぬかすき、人々を慰められた
か。私達は知つてゐる。

このようにうらぼんの行事は、み佛を供養し、サンガを
供養し、先祖を供養し、報恩のまことをいたすことを意味
するのです。どのように尊い行事か。私共はうらぼんを讃
美し、禮讃し、そして實行し、千數百年の傳統をうけつぎ
次代に贈りましょう。

(大正大學教授)

手 向 草

澤 田 學 遵

誦經はてなき人しぬび世にありし事ぞもともに語りけ
るかも

なき人もたしなみしとてうま酒を遺俗はすすむそのう
ま酒を

うま酒に酔へば兄きとにぢり寄り語りし顔の今尙思ほ
ゆ

好配の定まらざるを病みこゆる臥床にありて慨ちまし
けり

かりそめの病ひ癒えすうつし世に生命あらず詮すべ
もがな

青竹を割りたる如きそのさかに人みなともに好感もて
り

定命を越してありしも今後の精進こそと人ら期せしも

徒然草に現われたる法然上人



須藤 隆 仙

或人法然上人に、念佛の時眠におかせられて行をおこたり侍る事、いかがして此さはりをやめ侍らんと申ければ、目のさめたらむほど念佛し給へとこたへられたりける。いととうとかりけり。又往生は一定と思へば一定、

不定とおもへば不定なりといはれけり。是もたふとし、又うたがひながらも念佛すれば往生するともいはれけり、これも又とうとし。(元祿三年版徒然草吟和抄による)

徒然草は周知の通り、鎌倉末期の歌人、隨筆家として有名な吉田兼好の著にして、その存在は余りにも有名である。

この徒然草の第三十九段に右の如き元祖上人の御法語に

關する一節のあることも、淨土宗の方であれば大方が御承知の處であらう。

大正大學の學生の中には早くから卒業論文に取上げた方もおられるし、徒然草のこの一節は既に深く研究もし盡されているので今更喋々する迄もないが、私は丁度先頃古い元祿年間の徒然草吟和抄なる木版本を手に入れたのでその因縁によつて、少しく「徒然草に現われた法然上人」と題して筆を起してみる次第である。

徒然草に元祖上人のこの御法語あることは既に徳川中期、當時の宗乗の學匠としてその存在高い義山の勞になる「圓光大師行狀畫圖翼贊」(始め圓智の手になる)に記される所である。

翼賛には卷廿一に「往生は一定と思へば一定なり、不定と思へば不定也」の御法語を記して「此御詞和論語徒然草にも載たり」とあり卷廿二にやはり往生は云云のこの御詞を記した後に「佐佐貴四郎高綱遁世して高野山に有しが、ある時京へのぼりて源空上人にあひてとひけるは」として以下前記徒然草の念佛の時云云の文、及び疑いながら云云の文を記して、これらが徒然草の中に記されている旨を述べている。(そして往生はの一節と佐佐貴四郎の一節は和論語にもあるとしている)

即ち「往生は」と「佐佐貴四郎」の二節が徒然草と和論語とにあり、「疑いながら」の一節は徒然草丈にあるというのである。

和論語というのは我が國の天皇・公卿・武將・僧侶・等の金言・善行等を集録したもので、論語に擬した十卷の書である。著者不明で寛文九年刊行されている。

そこでこの御法語に就てであるが、「或人法然上人に」という、この「或人」は佐々貴四郎高綱であることが和論語によつて知られる。

念佛の時眠氣がさして怠りがちになつた時如何したら良いかという質問に對しと、「目が覺めたら念佛しなさいと答えている、誠に自然主義をモットーとされた元祖上人の面目躍如たるものあり、心憎い程の心醉さを覺える。

元祖上人の御法語は到る所にこの様な自然主義が窺える

のである。日蓮聖人あたりが全く對抗主義で無理押しの感があるのに比して、元祖上人は無抵抗主義で、無理が無い。前者日蓮聖人を火に喩えるならば、後者元祖上人は水である。水は高きより低きへと流れ、丸い器に入れば丸くなり、角な器に入れば角となる。斜面に流されれば何處迄も素直に流れ、途中障害物があつてもその下をくぐつてさり氣なく流れている。どうしても障害物がありて流れが不可能となればその儘とどまつて別に怠る様子もない。誠に泰然たるものである。この水の様に素直な行き方が元祖上人の行き方である。

元久元年、余りにも元祖の念佛の教えが盛んになるのを嫉んだ南都北嶺の衆僧達により念佛停止の運動が持出された時も、上人は謙虚に門弟を教諭し、七箇條起請文を制したりなどしてあく迄も穩當な立場を堅持している。この起請文の中に「無智の身をもちて有智の人に對し、別解別行の輩にあいて、このみて諍論をいたす事を停止すべき事」なる。一條がある。何と奥床しいことではないか、現代愚にもつかない様も稚論をひつさげて盛んにあちこちに難論を吹かけ歩いている某々宗などと比べて正に天地雲泥の差がある。

建永二年元祖上人は七十五才の老軀を以て土佐國へ配流となつた。我々宗徒としては今尙胸迫る思いに苦しめられる一齣であるが、この時上人は何と仰せられたか、「流刑

さらにうらみとすべからず、その故は齡すでに八旬にせまりぬ、たとい師弟同じ都に住すとも娑婆の離別近きにあるべし、たとい山海をへだつとも、淨土の再會何ぞ疑わん（中略）念佛の興行洛陽にして年久し、邊鄙に赴きて田夫野人を勧めん事季來の本意なり（中略）今事の縁によりて、季來の本意を遂げん事、すこぶる朝恩ともいうべし」そして「邊土の化縁既に熟せり、誠に喜ぶ所なり」といつて喜んで配所に向われたのである。

何と尊いことであろうか。上人ならでは徹し得ぬこの偉大さに唯々頭が下るのである。

これ等は皆元祖上人の自然主義をモットーとするその御心情の表れであつて、「法爾の道理」という、いわば大自然の力に順ずるといふか、眞理に逆らわないといふか、そのような人生觀の上に立たれた如實の御姿である。

今徒然草のこの一節も、佐々貴高綱の質問に對するそのお答えは、上人の答えとして極く當然の御言葉であつて、このような當然さの中にこそ非凡な尊さを一層強く信愛するのである。

次に「往生は一定と思えば一定、不定と思えば不定」、この御詞は「上人常に仰せられける御詞」（勅傳廿一）や「往生大要抄」等にも出てくる御言葉である。即ち「必ず救われる」と絶對の信をもつことによつて始めて救済という自身を宗教的世界の高峯にうち上げることができるとい

うのであつて、これは實に意味深い御言葉である。宗教はいう迄もなく心の問題であるが、この心の問題の重要さを上人はこゝで極度に力説しておられる。信心の深さを上人は身心の定まる處として力説しておられる。この深い心の取扱ひ方に、我々は一層淨土の有難さを知り、同時に上人の偉大さを知るのである。凡そ信仰の問題はこういつた心の置き方の問題であらう。純粹な宗教の世界を私達はこゝに教知されるのである。兼好が「これも尊し」といつてゐるその言葉が頷けるのである。

「疑いながらも念佛すれば往生すともいわれけり」こゝにこの言葉をもつて來た所に兼好の非凡さがある。流石一代を飾る思想家である兼好は言葉の置き處を知つてゐる。前には「疑わず信ぜよ、信じたまふが救われた姿である」という意味の言葉であつた。その後「疑いながらも救われる」という言葉をもつて來てゐる。そして「これも又とうとし」と結んでゐる。

「信」と「不信」とのこの二語の逆説的矛盾は如何であらうか。兼好はこゝにこの逆説的矛盾的な二語を並べて、そして法然の偉大さを説明しようとした。この卓越した兼好の着想は見事に當つてゐる。讀者はこの二語によつて、つくづく法然というものの偉大さに目も魂も奪われることであらう。

疑いながらも念佛すれば往生する、こゝに大悲の廣大

さがある。先には決定と信じて念佛すれば決定するとい
い、今は疑いながらも往生すると説いている。そうする
と彌陀の大慈悲というものはもうどうでもよい、疑つて
も、疑わなくても、念佛さえ稱えればそれで救済にあづか
る事ができる。疑つても疑つていなくても、彌陀如來が私
達を哺む氣持には寸分の違いもない。アバレン坊の子供を
母親が抱き上げて、その母親の膝の上で子供が泥足で大ア
バレをしているように、疑つていても如來は凡夫を救済し
てしまふ。そうなるともう凡夫というものは、もはやどう
しようも絶対に如來の懷から逃れることのできない存在と
なつてしまつてゐる。「南無阿彌の阿米にかかりし魚なれ
ば」この行誡上人の歌のように既に網の中に圍われている
泥凡夫である。我々の量りなど少しも容れられない。絶対
的に救うという彌陀の悲願は遮二無二我々を救つてしま
う。我々はもうどうすることもできない。こゝに本當の念
佛の有難さがある。この絶対救済の中に眞の念佛の尊さが
ある。それは相對ではない。絶対である、凡夫が考えても
及ばないような大きな力で救済の手は伸びかぶさつてい
るのだ。この絶対救済への覺醒がこの言葉である。疑いな
がらでも念佛すれば往生する。この絶対救済の姿に本當の尊
さがある。先の言葉は信心の價值を表わす。今の言葉は宗
教的世界の偉大さを表わす。共に相反したる言葉のよう
であるが、この二語の止揚された所に法然教學の尊さがある。

ただこゝで考えなければならぬのは、この言葉が徒然
草にはあるが、他の元祖の法語として伝えられるものの中
にこの儘の形で見當らないということである。

兼好はこの言葉を一體どこからもつて來たのであろう
か。その原語を求めることは困難である。

だが元祖上人と明遍僧都との問答が和語灯錄や勅傳、そ
の他に伝えられておりその中に「散心ながら念佛申す物が
往生すればこそ、めでたき本願にてはあれ」とか「心は散
り亂れ、妄念はきおいおこるといへども、口に名號をと
なへば彌陀の願力に乗じて決定往生すべし」とか「唯心は散
亂すれども、口に名號を稱すれば、佛の願力に乗じて往生
疑なし」などとあり、これらはこの徒然草の文と同一内容
のものであつて、恐らく兼好はこれをとつたものであろう
と思考するのである。

さて、以上徒然草の御法語に對して愚存を記してみた
が、兼好はこの徒然草の中で、僅か三片の御法語を記した
丈で元祖上人の御人格や、その教えの尊さを充分に表現し
ている。實に巧妙な筆致で、法語に本の二三語を附した丈
で立派な元祖讃仰の意味を十二分に發揮している。流石に
文章を以て知られる兼好丈のことはある。先年小川龍彦氏
が作られた新定法然上人繪傳に、武者小路實篤氏が序を寄
せて次の如くいっている。

「一寸聞くとちつとも尊くない、あたりまへのことを法

然は言つてゐるやうだが、それを尊しと感ずる處に、法然の偉さを同じ深さで感ずることが出来る兼始もただものは思はれない。法然を基の名人とすれば兼始は高段者だと言へる。なんでもない石と思へる石が。いかに衆生に往生を得させる名手であることを彼は知つてゐるのだ。法然は矢張り大きいと思ふが、それを兼始は見ぬいてゐるのだ」

武者小路氏のこの言葉には味がある。

確かに元祖上人は偉大であるが、その偉大さを知つて、その肝心を見ぬいていた兼始も流石であるといえる。

淨土宗徒にとつて徒然草の上に現われた元祖上人の御姿は一層尊いものと感ぜられる。

(附言、)

私はこの間ある所から徒然草の元祿三年版の「徒然草吟和抄」を手に入れた。全五冊あり、木版刷の和本を手にするると一層情味が深い。カサカサとした現代の活字本ばかりを一日に何冊か連日手にしなければならぬ私にとつて、シツトリと掌の上にのしかかる和本の重さは何ともいえない程の嬉しさと落着きとを與える。

この元祿本に元祖上人の法語の部の三十九段の注釋がついてゐる。仲々面白いので左に記しておく。

「法然上人源空也、姓は漆間氏作州稻岡人也、父は時國母は泰氏長保二年四月七日に生ず十□歳にして出家也○念佛——一枚起請文に曰はく觀念の念にもあらずとあるごとく

下根をみちびかんための念佛なれば稱名念佛也○行を——稱名修行也○目のさめたらんほど、程は時と云ふにかよふ也、目のさめたる時と云心也○往生、安樂世界にゆくを往といひ蓮花の中に生ずるを生といふなり○一定と思へば一定不定と——元より已心の彌陀なれども一念の迷に依て衆生と□也、されば一心に念佛すれば往生するぞと決定すれば是則一定也、決定の心なくしては迷の上迷にて則これ不定也○うたがひながらも念佛——衆生うたがひをおこして念佛せざる時はいよ／＼罪惡重るものなればうたがひながらも念佛すれば自然と彌陀の願力にひかれて惡業を滅する也」

刷りが不充分で□の部分は判然としないので殘念である。長保二年とあるが、これはいう迄もなく長承二年であらう。

因に先に和論語のことも出たので一言するが、和論語には外に「皆人のおのれとおのが智慧に迷ひてちかき極樂を遠くし、かほどやすき世間をくるしみとなす事は淺間しき事なり。何なる樂みがありて此夢の世に、夢のごとくの智慧をふるまひけるぞ、本來の智慧といはんは、佛教を疑はずして身命をも打すて後の世を願ふべし。愚なるかな、はかなき處の身を愛して、永き苦を愛なん事を怨しき」と、又「源空曰、姪欲酒肉をもて不淨とせず、諸道の中には智慧をもて清淨のみなもとゝするなり」の二つの法語が收められてゐる。翼賛には後者の「姪欲云云」の法語を「これ偽書の語なり取る可らず」と註してゐる。以上

尾張の圓成寺に詣でて



雄 俊 橋 大

濃尾の平野は果てしなく續いて、盡きる所を知らない。森影は見せても、山影は求める方が無理らしい。年に二度、三度京に旅をする私も、ここ二年程尾張に立ち寄ることはしなかつた。忙しさのためである。俗縁を辿るとすれば、此の地こそ私にとつて忘れ去ることの出来ない土地なのであるが、それですら訪ずれ得ない所に、どうにもならぬ繫縛が存在するのである。

去る日、名古屋丸榮デパートで、法然上人がみがまりましてより早くも七百五十年の御遠忌を迎えようとしている、その御侍受けの事業の一である「法然上人奉讃展」が行はれているとの由を報じた友人の勧めによつて、十二日の夜行、「浪速」の人となつて西下した。法然上人関係のものは全集編纂の折、一度は目を通したとは思っているものの、若しや目こぼしでもと言う懸念が、この旅を是非とも成さなければと言う意欲となつて現はれた。

八階大ホールにしつらえられた會場の入口

は建中寺の山門をもつてモデルとし、ホールには四間四面の本堂が建てられ、山門を入つた左側には、法然上人が元久二年四月一日、關白九條兼實の特請によつて法談をなされた後、退出されるのを關白が見送り、庭におり立つて上人を拜禮されていたところ、泉水の上にかかつている橋を渡られる上人の様子がただ事ではない。時に上人は地をはなれ、少しばかり虚空に浮んで足下に蓮花を踏み、頭の後には頭光が現はれていた。このような言傳えをもつ「頭光の橋」の奇瑞を現はしたバノラマが、恰かも生きる法然上人にまみえるかと思はせるばかりの精巧さでつくられていた。このたびの展覧は淨土宗と言うよりは、多く西山派関係のものが並べられ、名體不離の御名號（誓願寺藏）四十八光眞向彌陀の像（同寺藏）龜山天皇御讃圓光大師自畫像（粟生光明寺藏）は一度拜見の榮を得ていたと言ふものの、禪林寺から出された法然上人が熊谷に出された返書や桑子妙源寺の法然上人御給傳はその所在は知りつつもその機を得ないものであつたが、就中法然上人の御自筆本と傳えられる「決定往生集」（禪林寺藏）や

曾つて上人の御所持になられたと言う法華玄義經藏(同寺藏)は拜見するだに、そぞろ當時のありし日の事どもが思い出されて感涙に咽んだのであつた。開館を待ちきれずに入り、布教師の御説教をよそに、集う善男善女の間をぬつて三時間ばかり、其處に立ち去り難い思いを残して拜觀し、何時の日か遇うことが出来るであろう幾つかの、上人の水堊の跡や御影に別れを告げたのは一時を可成りすぎていた頃であつたらう。

二

昨秋の何時の頃であつたらうか、三河津について一寸考えていた時、林隆碩上人から尾張にも圓成寺と言う津院があり、此處から輩出した高僧のあつたことも忘れないようにと、お便りがあつた。圓成寺と言えば、關通上人の御遺跡地であり、持戒念佛の道場である。従つて機會を得たならば一度は訪ねて見たいとは思つていた、その機會が法然上人奉讃展という祝福すべき時が機縁となり、歸途足を延ばして中一色圓成寺に參詣することにした。名鐵津島に降り立ち、車をひろつて中

一色にと急ぐ。右に左に續く田畑は、野良に出て働く甲斐々々さが見當らぬだけに冬眠に行つた感じがする。時たま行きかう人も、頼かふりをして、伊吹おろしの肌寒い、身をつんざくばかりの寒風をさえぎっている。全くのどかな田園風景を呈し、その中をまつしぐらに走る車を市場で捨て、川沿いの道を西に進むこと二町ばかり。鈴鹿の連山は眞白い銀の雪をいただき、壯麗さをただえ、遙か彼方に下界を見下す伊吹の季峯は人の心をとらえる。とある森の下あたりに、農夫に寺の所在を尋ねた所、親切に教えられ「ようくお参りしてくれあせ」と答へるあたり、信仰の地と言う感じがするのも關東人の故であろうが、何か佛教に對する床しさが自然のうちに汲みとられるようだ。

境内に一步入れば、清淨そのものの庭には塵一つ留めていない。美しく掃き整えられたところを、「お寺のようきれいだ」と、きれいな掃き清められた所の代名詞に寺院が使用されている地方なればこそ、此の感は強く身に沁みる。清淨な地はまた壯嚴が具はり、自から佛境に入つたという感じをおこさせ、



門前には右に「不許葷酒入門内」、左に「大界外相」の石標が、淨土律を標榜する寺院であることを無言のうちに知らせるかのようになてられている。「慈興山」と書かれた鐘樓門の上には、昭和二十四年十一月改鑄の梵鐘がつるされ、その左手前方に本堂が、關通流の配置の構成をとつて建てられている。が、幾度びかの火災に灰燼に歸し昔の面影は知る

に由なく、名利と言うような感じも、周圍から醸し出される雰圍氣からは感じとられな
い。

刺を通ずれば、山主林僧正は在山して居られるとの事。尼僧の案内で僧正に會う。雜談
小時の後、佛名會の法會に參じ、時餘の一と
時を法悦のうちに過し、念佛稱名裡にいい知
れぬ感懷にふけた。とかく念佛地におち、
寺院は法要としての在り方に現在その生命を
頼つてゐるという聲はちまたにあふれ、信仰
心の少くなつたことを歎く仁の多い中に、此
處で身を以て證し、一座に列した喜びは、今
日の集いに、堂に滿つる老若善男女の參詣の
姿の見られたことであつた。生ける念佛、人
々の心の中に躍動する願いとして外相に現わ
れる念佛稱名の姿こそ尊い。これというのも、
當寺に住した關通上人や山下現有、林辨我を
始めとする諸上人の感化力に負う所大であつ
たろう。

圓成寺の創建された年代は知るに由ないけ
れども、境内に應安とか永和の年號をもつ古
碑も存するということであるから、若し此の
碑が寺院と無關係なものでない文化財とすれ

ば、創建は早く南北朝時代のことではなかつ
たろうか。傳うる所によるに其の頃は西方寺
と呼ばれていたらしい。其の後、江戸時代に
入つて品譽と云う小僧が再興し、以來淨土を
宗として居り、寶永元年（一七〇四）關通が
照譽靈徹に師事した時も、未だ西方寺と呼ぶ
寺名であつた。同六年冬には出でて江戸に至
り僧上寺に掛錫し、次いで諸山に名僧を訪う
て學を積み、併せて淨業の策勵に心身を捧げ
たが、學成りて故郷に歸つたのは享保六年
（一七二一）のことであつた。この年古知谷
阿彌陀寺の澄禪は世を去り、無能が逝つたの
は二年前の享保四年正月、此の俗世を斷ち捨
世念佛を修していた人々も次第に世を去つて
行つたが、それと前後して持戒を説く僧も、
一人ならず現われ、淨土律を主唱した敬首に
師事して關通が菩薩戒をうけたのは享保十二
年であつた。このような淨土宗の動きの中に
出でられた上人も、俗世にまじはり、紫香の
色をほこり、僧侶本來の道から逸脱した僧の
いたことをいたく慨歎し、形式的な圓頓戒に
あきたらず、嚴肅なる持律の生活をなさうと
常に心を用いた。又法然上人の古にもどして

念佛の宣揚にも心をかけるべきであると、心
に強く誓ひ、師照譽の示寂に遇ひ、同十二年
西方寺に住するや、其の實現のために獻身的
努力を捧げ、同十七年春、常念佛建立の願書
を提出し、關通流の本山となした。越えて元
文元年（一七三〇）護法のため律寺たらしめん
と發願して、名を圓成律寺と改め、時に義燈
を初祖、可圓を二祖と仰ぐことになり、自か
らは隱棲したが、それより前、此寺に住した
關通は享保十五年曼荼羅堂を建立し、以來續
いて佛殿僧房等の諸堂宇をしつらえ、更に丈
六の阿彌陀如來像を造立して安置するに至つ
た。

だが二百餘年という世相の變轉は、古きも
のを決してそのままにはしなかつた。或るも
のは残り、或るものは滅して遠き過去のもの
となつてしまつた。阿彌陀如來像は唯一の關
通時代の遺されたもので、その他の全ては今
やこの世のものではない。明治二十四年十月
當地をおそつた濃尾大地震に全てを失ひ、林
辨我上人の手によつて再興を見たとはいふも
の、其後再度の災にあつて失はれたものも
あるということである。鐘樓門を入つた前方

には新築の香り、ま新しい書院が建てられつゝあり、それは總門を入つた放生池の手前にある幼稚園とよき對稱をなしている。

佛名會の禮拜を終えた後、音吐朗々と念佛の聲聞ゆる一室に請じ入れられ。一服の茶を服しながらに語る老僧の悲願は淨土宗門の行方であり、圓成寺の復興であつた。曾つて淨土律を標榜する寺院は奥州に無能寺、江戸に長泉院、三河に昌光寺・貞照院・最嚴寺、京都に聖臨庵・西壽寺・成等庵・西光院、美濃に圓滿寺、美作の誕生寺、等二十餘ヶ寺を數えたようであるが、今も尙その法燈を傳える寺院は殆んどない。貞照院や昌光寺は其の第一の位置を占めていることは異論がないとしても、圓成寺はいくらか命脈を保つていと言ふことができそうである。僧は念佛をととなえなければいけない。稱名念佛を相續してこそ教化者の地位に座することも出来るし、教田の開發も出来るのである。僧たるものは念佛を稱えさせる機縁を俗家に對しあたえなければならぬ。佛名會を戦後再開した時殆んど見えなかつた人々も、逐年増加の傾向があるということを目にするに、全く頼もしい限

りではないか。

關通上人眞筆の法語軸を前にして、往昔の圓成寺は學山であつたらしいこと、關通上人や林辨我上人の當地に傳うる逸話、關通流寺院の建築法、淨土律に關することども等話は次から次へと續いて盡きることを知らない。

土地の人の心に法の燈びがもえ、念佛を口ずさむ人のあつたとしても次第にすたれて行く念佛は、時流におされて、昔日の面影をとり戻すのには困難が伴うようだ。それに何等かの手段をあたえて、「念佛の聲するところ」にすることこそ老上人の望みなのだ。元祖法然上人の七百五十年遠忌を迎えるのも、さしたる遠い月日ではない。上人の悲願は誠に涙ぐましいものがあり、「中京は背後に廣い平野と消費地を控え今後の日本にとり最も有望な地であると思う。建中寺は何といつても尾張淨土宗の本山としての性格を具えている。ここを中心に中京における淨土宗發展の畫策を企てるのも一方法なのだ」と熱涙下る卓論は、明日の淨土宗の在り方に、するどい批判と示唆をあたえているようである。

諄諄と語られる熱誠こもつたお話は誠に有

意義なものであり、宗學や宗史にくはしい上人のお言葉は、聞きつつある間に血となり肉となつて消えて行く。日も大分、西に傾けはじめた頃、老上人に寒風つんざく肌寒い田舎道を送られて、停留所に至り、名古屋行バスの人となつたのは既に六時を少しまわり、邊りはうす暗い闇にとざされていた。

(卅二年一月廿日稿)

八月号予告

卷頭言

佐藤密雄

鑽仰法然上人(三)

林隆碩

歴史の上から見た宗教の在り方

高柳光壽

彼岸

松崎可定

彼岸法話

宮林昭彦

殉教の聖僧 金光上人(二)

開米智鎧

經典講話 阿彌陀經の理解

福富海岳

小説 津戸三郎

鶴田湛泉

用語解説

石上善應

殉教の聖僧 金光上人 (一)

開 米 智 鎧

一 世捨阿彌陀佛

い。勿論道路とてあるではなし、唯峰傳へに進むばかり、さすがの偉丈夫も、稍疲れが來たらしい。

谷川に降りて汗をぬぐい、口を嗽いで一休みしようとしたら、水上から流れて來たものがある。よく見ると木造の佛様である。上人は我を忘れて拾い上げたら、阿彌陀様。

上人は歡喜踊躍、三拜九拜した。フト思うに此の水上には、必ず佛閣道場があるに相違ない。上人は法衣の片袖を、ちぎりとつて紐をこしらへ、御木像を背負つて、頂上を目指して急ぎ登つた。日暮に漸くたどり着いたは、正中山應身院である。

當時の應身院は、文治初年の伽藍記にある、二間に五間の入母屋作りも、翌々三年に炎上して、其の後三十年、名

時は建保元年春三月、今から約七百五十年前。處は合浦外ヶ濱、唯今の蓬田村邊から、津輕中山梵樹山を目指して、谷川沿に歩いて行く、一人の荒法師があつた。身の丈六尺二三寸、四十貫を超える太り肉、眼光炯々として而も柔和、髪も鬚も蓬々とのびている。黒衣は切れ／＼に裂けているし、頭上の笠にも窓があるが、右手の杖だけは、頑とした物を持つてゐる。これぞ「奥州皆淨土」の悲願に倒れた、東奥念佛最初の道場、浪岡西光寺の開山、金光上人其の人であります。斑雪と云うよりは、まだ相當な残雪に一足ことのぬかるみは、體重のせいばかりではないらし

ばかりの菴室のように思はれるが、修驗宗三山三身院の一つで、云はば本山格の寺である。

そこで上人は、一晚の宿を、住僧忍玄坊に御願いした。住僧は大に喜んで、上人を迎へたが、背負つて佛像を見つめて、

貴僧の負つてゐる佛像は、去る日私が棄てた佛像である。穢らしい佛像だから、本來聖場の修驗道場に、持つて來てはいけない。早々に捨てゝ呉れ。

上人は驚いて、

勿體なくも阿彌陀様を、投げ捨てよとは、餘りに無體な御言葉よ。惡人あつての佛法で、惡人のないところには、佛法は要らない。假令何人の作なりとも、阿彌陀佛には相違ない。

住僧忍玄坊は、

然らば貴僧は、退ち去れよ。

上人は大に悲しんで、

然らば此の堂の軒下に、一夜の宿りを御免し下さい。

上人は自分の法衣を脱いで、佛様を包み、笠松の陰に安置して、氷雨の降る寒夜中、應身院の軒下に眠つた。上人の感想錄に、「世にぞ捨てらる阿彌陀佛、仙谷より拾ひ來れども、共に塙のなきぞ悲しき」と述記せられている。其の時不思議や大空に音楽が聞えて來て、五色の光明は、幽か雲間に現はれて、上人を照した。あまりの有り難さに、

巨きな體を地に伏して、禮拜した。天空に妙なる聲あつて金光よ。汝は夷國に來て、未だ汝の住むところもない。日本國は南北に、細長い國であるが、其の南國には、淨土の法を弘める者は二三あるが、北の夷には誰一人ない。汝は南國に育ちながら、法の爲めに、身近の困難と闘かつてゐる。殊勝なことだ。

と激勵された。

夜中あまりにセキするので、忍玄坊が起きて見たら、上人は軒漏る雨に、笑顔し乍ら眠つていた。忍玄坊は此の護法心、此の信念に大に感じて、上人を堂内に招き入れた。

佛法の夜話は更に續く

忍玄坊 御不審あるは當然だが、これにはこんな譯がある。

去年私は弟子の照法坊に、造作を頼んだ佛である。然るに照法坊は、山では寒くて、手の自由は利かないからとて、地頭作右衛門殿の宅に下山して、六根清淨、一刀三禮の心願も、少時の間。

時に作右衛門殿に、美人の娘が一人あつた。茶を進め飯を給仕してゐるうちに、二人は何時か、戀仲となつた。照法坊は修驗本來の掟を破つて、行者役小の祥月十二月十二日に至つても、御木像は完成しない。私は不審に思つて、地頭の宅を訪ねて見たら、村人は皆よ、照法坊を嘲つてゐる。私は照法坊の處分を、行者の御告によることにした。其の夜の夢の御告に

汝は照法坊を、憎んではいけない。人間は皆自由である。照法坊をば破門して、その御佛像を拜まずに、清い谷川に流して、浄土に送り届けよと。

そこで私は照法坊に會つて、夢の御告をそのままに、坊を破門し、御佛像は、下の谷川に流したのである。

上人は大に心を痛めて、

假令破門者の作とは云へ、出来た御木像は阿彌陀様である。私は此の地に浄土教を弘めたいと、長い旅路に身體も精神も疲れ果て、よう／＼此の山を越えんとしたに、此の佛様を拾つたのだ。何卒此の佛様を、私に拜がませて下され。

忍玄坊は、顔に八字を現はして、

それは貴僧の願でも、聞き入れることは出来ませぬ。貴僧は我が佛場が、修驗宗流の清浄キヨジュを知らぬ。我等が宗派は、形整つた佛像よりも、心に穢れない者の、作つた像を尊いとし、姿形は豪華でも、心の穢れた作は嚴禁だ。假令凡形無形でも、穢れないものを尊ぶのは修驗宗である。貴僧の申す所も、悪くはとらぬが、修驗の掟に汚穢ケガレを作るは、私の心中に許し難い。修驗宗は、六根清浄の宗旨である。我等修驗宗徒は、どんな宗教でも、他宗とは云はない。何でも拜むのは修驗宗であるが、布教の手傳いすることは出来ない。我等の修驗宗は、世の進むに従つて、移り行く世の自由に伴い、新興宗教が出来ようと、それは自宗の再生と考

へて、唯世の中の汚惡ケガレを亡ぼして、世を清浄にするが爲めに、深山幽谷に、清浄の行をしているのだ。貴僧の宗旨の浄土教とは、毛髮一本、紙一枚の違いだが、自分の宗旨だけ、最上無上の法と信する、貴僧は少し輕卒だ。

時に上人は、

御坊の説かれる修驗宗とは、罪ある者は救はれない。無智の人達を惑はして、自分の宗を最上無常と説くのは、我等浄土教徒としてみれば、甚だ輕卒である。

時に住僧は大いに怒つて

御黙グモクりなされ。汝が如き、大界を知らない旅僧の、知る

ところではない。我等は大寶辛丑役行者の歿年の昔から、凡べての欲望を捨て、修驗宗の弘布もせず本宗は不實行宗、日進月歩の移

り行く、世間の開化に進みゆく世の姿を、修驗宗と心得捨舊新趣は本宗の宗風、心を清めて、文學、藥法、工法、水利、土工、

兵法等を民衆に教へる。本宗は教理を其の儘、實生活に直結即應する現在教で、否修驗宗によつて産れ、育てられた當時の社會である。

更に人間の心情ココロモチを、正しくせんが爲めに、佛法僧の三寶を尊び、氏神國神等の、本地垂迹を說法するが、人間各自の守り神を、尊ぶのは自由である。決して外教を排斥はしない。たゞ造惡の外は、皆修驗宗大慈悲の、藥籠中にあると、説くのは我が宗である。我等は他宗と云うことはなく、汝が浄土教も、我等が修驗宗の中に、念佛教として、

取り入れてあり、未だ汝の知らぬ、異國のキリスト教なるものを以て、人間の自由を説いている。我等が許容し難いのは、唯造惡の一つだけ。

こゝで修驗宗の構成を、簡単に述べさして頂き度い。支那の隋唐時代には、支那本來の道教や儒教の外に、佛教は勿論、景教キリス、妖教ゾロアスや、回教ムハメ、マニ教等が入つて来て、各々研を競うたが、思想の動搖衝突は、何等かの整備統一が、必要となつた。我が日本でも其の通り。從來の神道の外に、新に佛教が傳來したので、神佛二道の争いは、一般承知の通りである。是が調整を謀かつたのは、法報應三身即一身説の、三位一體論は、玄奘門流に依つて主張され、従つて大日、彌陀、釋迦の三教一致も成立した。本地垂迹の役行者の修驗宗も生れた。故に修驗宗とは、如何なる宗教でも修行すれば、功驗あると云うことになる。

論争は更に續く、

上人 貴坊の云はれる、役行者の如き、一宗を開いた祖師は、永代にも稀有と聞いている。然るに其の教を、廣く世に弘めずに、自分等ばかりで信ずるとは、地下の寶と同様で、他人は寶を知らずに踏みつけて、果ては土に化して、其の價值を失うが如きもの。私が秘かに思うには、佛力他力を、自分の行力の如く見せびらかして、それを以て非違を飾る、笑止の事だ。

忍玄坊 御坊の感想は尤もだ。然るに貴僧は、「神佛は常に人身に再化して、娑婆に生れて、末世の衆生に説く」とある、意味を知らない。貴僧に開教を托した、師の御房も我等が大師役行者や、代々の恩師等が、皆如來菩薩の化身である。

御釋迦様は、娑婆往來八千遍と云い、役行者は、娑婆往來幾萬遍と云つてゐる。淨土の宗祖法然上人を、初代法明坊の再誕として、「不住なれども、大泉院の第六十一世とする」等は、皆回教に基因する、修驗宗の再生説である。

忍玄坊はまた、

貴僧は自分の習得した、淨土教こそ、最上無上の法と説かれるが、井中の蛙大海を知らずで、而も口先だけの聖行を説く。いじけた根性が淺間しい。そんな心こそ、自宗他宗と争いを起し、無智の民衆をかり集めて、ヤレ佛の名代ジャ、活き佛ジャとの増上慢。造惡の者も一向に、念佛を稱へれば、罪障消滅とは笑止千萬。諸欲に満ちた、三世の衆生を教化するは、貴僧の如き、生ナま温い中和の誓願や、口先説法などは、咀はしい至りである。心に問うて恥ないか。心眼を開いて、よく世間を觀るがよい。夢の浮世に、夢を追う衆生なれば、貴僧の口先に迷はされるが、やがて貴僧も民衆も、自罔自欺に墮るは明白。

早々に故郷に歸つて、心を學び心を清うして、民衆の導入は考へずに、先づ自己の第一步を歩み得る、眞人間

になれ。我が修驗宗は、學心なき者、行道に無智な者の眼には、諸々國々の聖者の、感得力を借り集め、綴り合せて、正當化せるものゝ如く見えるも、凡智な者には無理ないこと、貴僧の心の、思うまゝに任せて於く。

世界諸宗教の粹をとり、佛教各宗の華を集めて、修驗宗は成立するが、集めて大成したばかりではない。三位一體論を振りかざして、其の根本精神を確立し、現代を救うは、政教一致に在り、高尚な教理を、其の儘説くよりは、實生活に即應して、人權の平等を、男女の同權を説き、共勞共働を高調し、社會施設を整備したことは、現今の宗教界にも勝る、修驗宗であるが、今は暫く割愛する。

上人 然るに。惡人あるが故に、我が淨土教がある。阿彌陀佛教がある。此の惡人を救う方便は、一切衆生悉有佛性であると、萬機普攝を主張したらしい。

忍玄坊は聲張り上げて、

汝が口にするところは、役行者の當時から、我等も民衆も、千萬遍も耳に聽いている。我等の宗祖役行者は、忝くも一身に、所有荒行苦行して、一日二十四刻間、一心不亂に精進して、弟子門弟に教へて云うには、「神佛に親近するは、萬經空讀の者でもない。財寶奉納の者でもない。國主國王の如き、供養者でもない。唯誠心の一である。性を僞め情を殺して、一向に、肉體を滅盡する^{苦行}力を養い、我命我身を顧みず、榮華は無用、民衆の爲めには、不惜身

命、實行力が最第一、人間は常に、心を刺磨すべきである。心正しからざれば、其の行正しからず。修驗を志す者は、先づ心を磨けとは、宗祖行者の遺言である。

修驗宗輝光極樂^{高天原と極樂の合體}の、昇天往生は、苦行を生因とするが故に、苦行の嚴修には、精神の刺磨、刺激練磨は、修驗宗の最大要素である。

上人は大に痛感して、

私は北國の凡僧と、侮つた譯ではない。數々の説教に、初めて自己の淺聞しさを知つた。心中にいたく泌みて、返言もない。それはそれとして、私はしばらく、此の山場に修行して、我も修驗宗に入門し度いと妥協に出たらしい。

忍玄坊は笑つて、

旅僧はそんな弱い心では、法衣に恥るとは思はぬか。貴坊がこゝに参つたのも、前世からの何かの因縁。貴僧の師法然房も、亦我が師の化身なるかも知れぬ故。貴僧の望みのまゝに、此の山の道場を、住居苦行の所として、使用せらるゝも宜しい。私は干海の田作りに、明日は下山する故、留守を頼むと。本宗は共勞共働、従つて半僧半農は、當然である。上人は大に喜んで、

然らば此の御木像は、如何にすべきか。

忍玄坊 拾はれて來るも亦、佛の何とやら。此の山の下場

鈎掛をの衆人堂^{公會}に祀るもよし、亦行丘野の、荒吐堂^{當地方}

神は田道將軍を氏神とするに祭るも宜しい。貴僧の意に任せて、私は今夜は

吉い夢でも見よう。

(未完)

——記——日——印——滯——(六)——



——也——眞——井——日——春——

——インドの御菓子とタバコと——

インドは日本で考へる様な種類のお菓子は全くない。洋菓子とか蒸菓子とかいふ様なものはどこにもない。大體牛乳が豊富な國であるから、ミルクと油をフンダンに用ひ、そして濃厚な砂糖味のものが、インド人の好物であるらしい。私たちは一年たつた今でもまだ、インドのお菓子を頂いたあとは一食抜かねばならぬほど腹にこたへすぎる。また油が各種あるので油を用ひたものも多い。日本の薄茶といふ様なものや玉露なども砂糖を加へなければインド人の口には全く合ふ見込みはない。ところでインド人は砂糖をとりすぎる以上にとるのであるが齒が悪いかといふと齒の悪い人は極めて少い。彼等は子供のときからニム樹の枝を折つてその枝を楊枝にして齒をみがくのである。大へんニガイ枝らしいが十分、十五分といふ時間を時には三十分近くも時間と手間をかけてたのしげに齒をみがいているのである。煉齒みがきも買ふことが出来るが極めて高價である。しかし一方子供の時分から砂糖を取りすぎるために何か身體に缺陷が起つて來るらしい。インドの學校は五月六月が夏休みであるのでその前三月ごろか

ら各種の運動會がはじまる。その頃にはギブスで手や足を繃帶した學生や生徒を澤山見かける様になる。本當に驚ろくほど多く出るのに氣味悪くさへなるほどである。大人たちは何か緑の葉に石灰をぬつてその中に肉桂やらその他各種の香料を入れたものを噛みながら眞赤な唾をはきながら、楽しそうにしてゐる。これはベンガリーではパンと云つてゐる。私達も會食などに招かれると食后必ずこのパンを勧められるが一寸耐へかねるほどにがくて氣持のよいものではないから唾が赤くなるまで噛んでゐることなど到底出来ない。コーヒーの入れ方にむづかしいテクニクがあるのと同じ様に紅茶にも上手な出し方があるらしい。インドでインド人の家庭にまねかれて飲む紅茶は本當に美味しい。まさか日本の味の素を入れる譯でもあるまいが、味の素を入れぬ料理と入れない料理との差ほどに味がちがふ。インドのタバコの吸ひ方も少しかわつてゐる。全部が全部ではないが多くの人は人指指と中指との間に巻タバコをはさむ。そして手を中空の拳型にして親指と人指指との部分から吸ふのである。紙巻タバコが吸へる人は中流以上の人であり、一般のインドの土民たちはタバコの葉を卷いた一寸ほどの短

いものをキツイ味がするので顔をしかめながら吸んでゐる。そんなにまでして吸はなくてもよさそうなのにやはり趣味なのであろうか、嗜好なのであろうか。中には身體全體がヤニくさくなつてゐる人にも汽車の中などで出會ふこともある。老人は一旦煙を水の中にくぐらせる式のキセルで粉タバコを用ひてゐる。タバコの扱ひ方なども不器用である。やはり日本人は手先きが器用なのでお菓子も見た目に美しく作り上げるがインドでは實質本位で見かけなどは全くかまつてゐない。また米作地帯である此處ベンガル州では米を種々に加工した軽い各種の菓子を作つてゐるけれども、それらは日本でも信州とか新潟とかによくある式のものであつて特別なものではない。それにしても私達の一番の悩みは齒をいためてしまつた事である。インドの米の中にある石粒を時々噛みつけてゐるうちに段々ひどくなつて仕舞つたが、インドでは日本の様に上手な治療をうけることも出来ないのに大散財になつて仕舞ふからである。

洪水神話

三笠宮様の古代オリエント學の御研究以來ノアの洪水神話が日本の一般の人々の興味の

話題となつた様である。ところがこゝろ興味は日本だけでなくインドでも興味がおこつたらしい。スールヤカンタ・シヤストリ博士の「サンスクリット文學に於ける洪水傳説」といふ本がある。シヤタバタ・ブラフアナにしまつてインドの大敘事詩を経てブラーナに至る全資料を紹介してゐる。彼はブラーナの中に十五種の出典を出し附録の中ではカーシーの傳承、スメリアの傳承、ギルガメスの傳承などを紹介してゐる。彼はフランスのアカデミーの會員でもあり、バンジャブ大學の梵文學部の部長であるからその道の權威者なのである。こゝろ研究でなくてもインド人の宗教の中心をなすヴィシュヌ神崇拜は洪水神話からはじまる十種の受肉を語つてゐる。ヴィシュヌ神はもともと太陽の光照作用を神格化した神であつて、リグ・ヴェダ時代に僅か五回しか現はれないものが次のブラーフマナに入つて重要な神となり、後世のインド教では主要神の一つに數へられる。この神は又佛教經典の中でも「毘紐天」として受けつがれてゐる。インド教の信仰ではヴィシュヌ神は人類を救済するためいろいろの形をとつて現はれるといふ。その一番はじめが「魚」であつた。世界掃蕩の大洪水が起つたとき、

ヴィシュヌは魚に受肉して人間の祖先であるマヌの乗つた船を曳航して危難を脱れることを得しめたといふのである。この次が龜であつた。むかし神と魔が不死の甘露を求めて乳海の攪拌を行つたとき、ヴィシュヌは龜となつて、攪拌の棒に用ひられたマンドラ山をその背に擔つたといふのである。この乳海攪拌の有名な彫刻がアンコール・ワットにのこつてゐる。インド教ではヴィシュヌ神は第五番目に倭人となつてアスラが支配し惡魔バリの測量しつゝある地上世界より三界の主權を奪ひかへすために、三步の範圍だけの土地を譲つてもらふ許を得て三步を以て三界を測歩する本性を現はして三界の主權を奪回したといふのである。このあと第九番目に佛陀をそして第十番目に未來佛としてカルキ神を立ててゐる。このときには人間の壽命が二十三才となり世界は末世の様相を呈して来る。このときヴィシュヌ神が受肉して救済のために現はれるといふのである。インド教がこの様にして佛陀をもその中にとり入れてゐるのであるが、ここでは本來普遍的宗教としての性格を有してゐた佛教を封鎖された民族宗教の世界の中に閉ぢ込める事になつて仕舞つてゐる今年インドの佛陀二千五百年記念の年いろいろの

行事によつてインドの佛教が本來の性格をとりもどすことが出来るかどうかといふことに大きな關心がかけられるのである。

——インドのお月様——

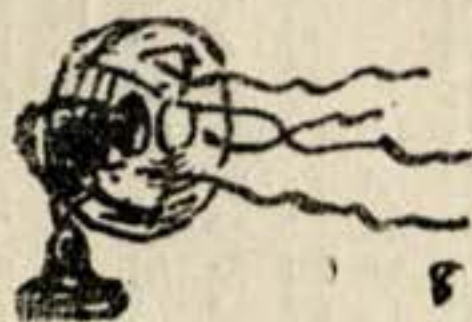
十二月のインドの月は雲なき空をひとり照す壯嚴さに心まで澄む思ひがした。そのあと毎月の満月がめぐつて來た。毎月缺かすことはなかつた。しかし皮肉なことに日本・シナの兩方ともでこの月の月こそ待つ仲秋名月の月だけ今年は今雨雲に覆はれて見えなかつた。佛陀時代の佛教詩人バンギーラサ長老の月を歌つた名文章にふれたのは學生時分であつたが、法然上人の御詠と傳へられる「月かげの至らぬ里はなけれどもながむる人の心にぞすむ」といふ淨土宗の宗歌を毎月二十五日の聖日に知恩院の大殿に參集する男女千人の學生たちと合唱したあと、時々特にこのことだけを見學に來た外國人たちにいろいろ説明したりしてゐるうちに、この歌から宗義に定める様に觀無量壽經の「光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨」といふ一節に定着させるよりも、もつと廣くインドの佛教經典にあとづけたい様な氣がいつも起つてゐたのである。そして類似した漢字譯例を拾ひ出

したりしても見たし、バーリのニカーヤの中からも探し出しもしたしかし。こうした遍歴の後に、いま幸にもインドに來て樹下に冥想しつつかそけく流れる夜の花の芳香につつまれて額に月光を浮びながら法然上人の御心境を考へて見たりしてゐるうちにいろいろ疑問も浮んで來るのであつた。法然上人の淨土立教開宗が善導大師の觀無量壽經疏の「願彼佛願故」の文であつたとしたならば、どうしても「ながむる人の心にぞすむ」といふ表現はとるわけには行かない筈であらう。彌陀の慈光に觸れ行住座臥彌陀佛とともに在りと御信念をもつて居られた法然上人がこの現世の哀れな有象無象のうちながむる人にあたる限られた少數者への門のみを公認せられる譯はない。

して流れて來てゐる宗教のヘゲモニーとは別に、その様な宗義流の理解に甘へることなしに法然上人に現代の課題を提げて直參肉薄する意圖をもつて來るべき七百五十年の御遠忌をむかへたいと思ふ。それにしても法然上人の人間像の偉大さに反比例して本當の意味で我々の精神を導く歴史的事實の研究が行はれて居らないことに感を深くする次第である。こゝにいふ意圖をもつてゐるからと云つて、私は淨土宗インド派といふ理解體系を立てる心算はない。ただ自分自身の精神にだけは忠實でありたいと思ふのである。あと一年餘を毎月の満月の光を浴びて自身の信根を養いたいと思ふ。インドを愛したハイネの蓮の花の詩にある様に。

おわり

この意味から來た光明照益論といはれるものと文章を味つて見ても「攝取不捨」が語られてゐるのであつて残るものはない筈でなければならぬ。觀經の本文の息づかいから云ふならば「光明の世界」と「念佛の世界」とは同一外延をもつものでなければならぬ。「ながむる人の心にぞすむ」といふ表現だけから云へば天臺の理解を一步も出ない見解にすぎないと云ひ切つても言ひ過ぎではなからう。我々自身の問題として徳川時代の連續の様に



—小説—

苔



石 川 忠 正

昌吾が、父に伴われて安覺寺の小僧に住込んでから、すでに三ヶ月余り経ていた。年老いた和尚は、白い頸鬚をしごきながら、油ぎったテラテラした顔で、朝から晩まで、掃除と雑用に昌吾を追い使つて、まだ字一つ、經文一行も教えてくれなかつた。掃除に於ける和尚の嚴格さは、全く昌吾の想像に絶していた。和尚が日夜居間に使用している本堂の一間は、なかでもことにやかましかつた。障子の、棧の一つ一つを、和尚は、唾液で濕した指でなすつて見るのである。昌吾は、一枚の雑布を小さくいくつにも千切つて、それを濡らし、取換え取換えして、四枚の障子を拭くことを工夫した。

「お寺の修業は掃除から初まるんだ。しんぼうすんだぞ、いいか。和尚さんがお前さんお經教えると語つたら、もうしめたもんだ。掃除でお前を試験して合格したつうことになんだからな。わかつたがや？」

父はお寺へ来る前の晩、くどくどとこんなことを云つていた。

それにしても、ここの和尚は不可解な變人のようにしか、昌吾には思えなかつた。しかし、昌吾は辛抱をつづけた。

本堂の板敷を掃いていると、いつのまに來たのか、和尚が昌吾のうしろにぬつと立つている。とん、とん、と足踏みして、板の合せ目から浮き出した埃を無言で指示すると、ふわりと衣を翻えして去る。又、須彌壇の上や佛像が埃にまみれているので掃き出そうとすれば「そこは放つて置きなさい」と云つた。

和尚は殆んど毎朝、習字をする。墨はしずかにゆつくり擦るやうにと教えられていたが、朝は掃除で、いくら時間があつても足りない

いのである。それでも暫らくは、云われたとおりに行つていたが、或る朝、耐えきれなくなつて、どうせ誰も見ている人は居ないのだと、力にまかせてごしごしやつた。何くわぬ顔で、和尚に墨の擦りあがつたことを告げて、庭掃除にとりかゝつた。間もなく和尚が呼ぶ。敷居ぎわにかしこまつて見ると、横に長く廣げた晝仙紙の端に、一字忍という字が書かれてあり、和尚が筆を擱いて、眼そうな目で、それを眺めていた。

「墨は、拳一つの重みをかけるだけで、ゆつくり擦り落したのがいい。力を入れた墨は、筆にからみついて、字にむらが出る」

と、やはり眼そうなけだるい聲で、云つた。

和尚は又、足跡のついた庭には、決して下りようとしなない。時折逍遙の後に残した自分の足跡も直に消させ、ただ掃くだけでなく條目だつた掃目を立てさせるのである。そのような庭に立つた和尚が、日暮れ方など、どうかした光線の加減で、白髯も白い衣もふと金色に映えるときがあり、昌吾は恐ろしいものでも見るように、樹木のかげで身をすくめたことがあつた。

和尚は、金魚を愛玩していた。大きなガラス鉢は二階の床の間に置かれていた。濃い緑色のその水を、少し宛汲み出し、新しい水を注ぎ足すのも、昌吾の日課の一つだつた。一週間に一度は、鹽に全部の水をあけ、糞を除き、ぬるぬるした玉砂利と鉢の内側を洗うのである。緑色の水は、昌吾には名稱も解らぬ金魚が、尾を廣げてゆらゆら遊いでいるのを、和尚は、二十分も三十分も、飽かずに眺めていた。昌吾は馬鹿々々しかつた。水をすつかり新しくしたら、

どんなにかきれいだらうに、と思つたりした。或る日、昌吾は、鹽や小水を入れたバケツなどを二階へ運ぶのが憶怯だつたので、一抱えある四角なガラス鉢を井戸端に持つて來た。ところが敷石につまずいてよろめき、金魚鉢をかばおうとして、身をひねつた拍子に、井戸桁に打ちつけ、金魚鉢を割り碎いて了つた。

「どこも、怪我はしなかつたか」

和尚はそう訊ねたきり、一言も叱らなかつた。三四の金魚は無事だつた。別な金魚鉢に入れて二階に置いてあるが、和尚は見ようとしなない。水がふたゝび濃い緑色になるまでは見に行かぬつもりらしいと察して昌吾は、最初に水を全部新しくすればと思つたことを恥じて、毎朝二階へ上るたびに、淋しいような氣持を感じたりした。

こうした雜務に漸く馴れてくると、こんどは空腹が昌吾の最大苦痛となつた。十五才の胃袋は、腹一杯喰べたようでも、三度の食事の合間が遠くてならない。山門を一步外へ出れば、パンだのまんじうだのが昌吾の目を痛い程刺戟した。本堂の賽銭箱には、饑米に混つてざくざく硬貨が入つている。箱の外に落ちているときもあつた。それを拾つて買い喰ひをしたらという考えが、腹の虫と一緒に、昌吾を攻めたてた。そして遂に、昌吾は、その誘惑に負けた。ずるずると幾度も繰返した。或る朝のこと、例のごとく、賽銭箱の隙間に厚紙を差しこんで、十圓硬貨を掬い出していると、本堂の入口に人の氣配がした。ぎくりと身を縮めて、恐る恐る首を向けると、此方に背を見せた和尚がじつと立つていた。昌吾は、身も心も凍らせて座つて了つた。和尚は、そのまゝ足音も立てずに、ひっそりと

影を消して去つた。時間がひどく長かつたような、それでいて一瞬の出来ごとのような氣もした。何枚かの硬貨が、掌の中で、べとべとに汗をかいていた。その日は、何事もなく過ぎた。

翌日、和尚は築山の据に二坪ばかりに生えてる苔の、雑草を除くように、昌吾にいつけた。そこは、前々から、踏むことは無論、箒で觸れることも固く禁じられている場所であつた。苔の上には裸足で入るように云われた。一見雑草など無いと思つていたのが、いざしやがんでみると、細い草が驚く程無數にさゝりこんでいた。苔の草とりはこうして昌吾の日課に加わつた。

賽銭泥棒のことは幾日経つても、和尚は忘れたように云わない。昌吾はもちろん、あれいらいふつとりと止めていたが、心は重かつた。

一週間が過ぎ、十日間が過ぎた。苔の中の雑草は、殆んど取除かれたと、昌吾は思つた。

じつとりと朝露をまとつた苔の上に、木洩れ日が斜めにさしこんで、緑の寶石を打延べたように、しぶく耀きだす頃、和尚は出てきて、じつとうずくまつて眺め入るのだつた。幾千幾萬の露の玉を宿した苔の園は、光の干涉によつて、光彩の變化を微妙に展開して見せるのだつた。その中に一本でも雑草が発見されると、和尚は、早速昌吾に注意した。しかし、昌吾には苔の美に執着する和尚の靜寂な情感を、理解することは到底難しいことだつた。昌吾に云わせれば、苔も雑草も、同じ青草であり、むしろ、地にべつたり貼りついた苔を、汚ならしいとさえ感じた。

苔の草取りは、尚毎日續けられた和尚は、露の乾いた日中、庭に下りてきて、虫眼鏡で雑草を探し出すようになった。最早指では掴むことが不可能な、毛抜きを用いなければならぬような、細く短い雑草を、昌吾は目を凝らして、除かねばならなかつた。そうした日が又何日か過ぎた。

「まだ、あるぞ」

そういつて、和尚はいつまでも、もういいとは云いそうもなかつた。昌吾の神経は、すっかり疲勞して了つた。夜寢床に入つても、臉がひくひく痙攣した。昌吾は、これが、和尚の、賽銭泥棒に對する刑罰ではないかと、考えた。足の裏に觸れている苔が、幼いとき母から聞いた、地獄の針の薙のように、昌吾の心をちくちく刺した。和尚はどこまで俺を苦しめる氣なのだろうと思つと、故もない反抗心が湧いた。泥棒をした俺は、僧侶になる見込がないとして、出て行けがしにこうして苦しめるのか。若しそうだとしたら、誰が音をあげるものか、和尚が「お前は盗人だから寺には置けない。家へ戻りなさい」と、判つきり口にするまで、頑張つてやる。と思つめた。

「和尚さま苔をみて下さい」

和尚は、机の上の虫眼鏡をとり、衣の袖で拭いながら、庭に下りた。昌吾は、今日こそ草は一本もない筈だ。草がない以上、和尚は俺を寺に置く理由がなくなるのだ。今日限り寺を出てゆけと云うに違いない。俺はやれるだけのことは文句なく務めあげたのだ。堂々と寺を出て行つてやる。そう考えながら、和尚の背後に佇んで、そ

の言葉を待った。が和尚は

「まだ、まだ、大分あるようだな」

と云つて、腰を伸ばし庫裏へ戻つて行つた。昌吾は、胸が赫つと熱くなつた。四つ這いになつて苔を覗んだが、目先が茫と緑色にうるんで、苔も草も見分けがつかなくなつた。地に這つた手の甲に、ぽとり大粒の涙が落ちた。口惜しかつた。起上ると駈出した。物置から唐鍬を取出して駈戻つた。顔を眞青にして、唇かみしめながら、べりつ、べりつ、と苔を掻き削つた。新しい地表が、赤黒く、昌吾の足元に廣がり、匂つた。苔を一ト所に盛上げ、周りを、一かけらの苔もこぼれていないように掃き寄せた。庫裏へ行き、縁側に手をついて云つた。

「すつかりきれいにしました。もう一度見て下さい」

和尚は、庭の中頃まできて、無惨な削り跡と、堪の集積とをみつめた。

「ふおつー」

と云うような聲を發して立止つた。身を返すと、そゝくさと庫裏へ引こんだ。

昌吾は、手足を洗つて自分の部屋へ行き、呆然と座つていた。行爲の是非の分別もなかつた。思惟を失つた耳に、昌吾を呼ぶ和尚の聲が、遠く聞えた。本堂の方だつた。陽の當る明るい疊の上に和尚が居た。

「こつちへ來て座りなさい。お前もここへ來てもう三月になるな。待遠しかつたらうが、明日からは、お經を教えることにする。」

朝の掃除が終つたら、この部屋に机を置いて、用意しなさい。解りましたね」

昌吾は、自分の耳を凝つた。思わず顔をあげて、和尚の目をまじまじと見詰めた。やわらかい微笑がたゆたつていただけだつた。忽ち自分の顔が歪んでゆくのが解つた。兩手で顔を押えてたが、堪えても完えても、嗚咽がこみあげてきて昌吾の身體を揺すぶつた。

特價奉仕

- 一、寺院用佛具類一式
- 一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

講	經
話	典

阿彌陀經の理解(二)

福 富 海 岳

佛身佛土について

「從是」より「現在說法」に到る三十字が古來本經の眼目であるといわれている。従つて本經に於いてはこの三十字を理解することが何よりも大切である。何故なら三十字の中に佛身佛土が明かにされており、佛身佛土が現實に理解されるなら本經全體が必ず明かに理解されるようになる。法然上人の御歌に、

阿彌陀と申すばかりをつとめにて

淨土の莊嚴見るぞうれしき

とあるが、單に人間の理性や感覺だけでは理解されない。

念佛することの深智慧によつてのみ感ぜられ理解される世界である。大經には「法藏菩薩、今已に成佛して現に西方に在す。此を去ること十萬億刹なり、その佛の世界を名ずけて安樂と曰ふ」とあり、本經と全く同一である。法身佛に本具する大生命であり無限生命である大智大悲が直接我々に受用することができるようになつたのは完全に一人格の上に具現されたからで、それが法藏菩薩の本願成就である。かくてこそ釋尊は成佛されたのであつて、恰も大自然に本具する大電源が電線に電流を通ずることによつて直接受用することができるようになるのと全く同一である。念佛の聲を通じてその大智大悲を受用することができるようになつたのである。即ち稱名念佛には報身佛であり受用身

である阿彌陀佛の相好光明說法度生等の内證外用一切の功德が完全に内包されていて、その一聲々々が救いであり往生であつて、我々の佛生を無限に開發し慈育し、そこで始めて本經が理解され、佛身佛土に接することができるのである。私達が本經を拜讀して極樂淨土の存在と佛の現在說法とを何等不思議とせず理解できることは一に法然上人が淨土宗をお開き下さつた賜であるといわなければならぬ。

それから西方過十萬億佛土の極樂の存在であるが、釋迦彌陀二尊の完全に一致せられた教説に間違のあるべき道理は絶対にないのであるから、そのまゝに理解することが一番正しい。お伽喃の國ではなくそこから現實に彌陀の現在說法が聞えてくるのである。西方過十萬億佛土といつても六方に四組を加えれば十方になるのであつて、本經にはこの十方一切の諸佛が西方極樂世界に在す阿彌陀佛の本願念佛を深く證誠し勸信護念されているので、西方極樂世界が十方世界の中心であることをはつきりと理解できる。このことは大經に、

「東方諸佛の國其數恒砂の如し、彼の土の菩薩衆、ゆきて無量覺に觀えたてまつる。南西北四維上下も亦然なり、彼の土の菩薩衆、ゆきて無量覺に觀えたてまつる。」と示されており、彌陀の淨土が西方にあるとせられることは本經の通りで、そのまゝ十方世界の中央に嚴存してい

るものと解すべきである。それは太陽系の中心が太陽にあるようなものではないか。しかもその同一存在が觀無量壽經には「去此不遠」と説かれており、「西方過十萬億佛土」であるが、念佛して攝取不捨の照益を受け、心眼開くればそこが現實の彌陀の報身報土であり、去此不遠である。

今現在說法

阿彌陀經や一枚起請文を拜讀することは念佛の助業であるから一層有難く尊く念佛を相續することである。攝取の照益を受け、智慧光、歡喜光等の中に生活させて戴くことができれば、既に阿彌陀經を理解させて戴き、色々の意味で現在說法を受取つているのである。だから、本經だけが現在說法ではなく、淨土三部經はもとより善導大師の觀經疏、法然上人の選擇集その他淨土教の典籍として著名のものとは皆悉くそうである。この意味で大乘非佛説はあり得ない。わけても本經は釋迦彌陀二尊一致の教説で、その上方諸佛が證誠勸信護念讚歎されているのであるから、一言一句金言でないものはない。私たちがどんなに疑い深くても結局信ぜざるを得ないのである。法然上人の「漢語燈錄」五に、「聖道門の修行は智慧を極めて生死を離れ、淨土門の修行は愚痴にかへりて極樂に生る」と仰せられているが、全くその通りで、その信たるや難信であり、難中の難、無

過此難とさえいわれている。けれど、この難信も稱名念佛することによつて自然に突破することができ、攝取不捨の照益を受け、不退轉となり、佛の大智大悲に接し、現在說法を聞くことができるに到るから、實に有難いのであつてこゝに眞宗と異なる淨土宗の特色があるのである。このことを法然上人は勅傳第廿一に、

「法爾の道理と云ふことあり。焰は空にのぼり水は下りさまに流る。菓子の中にすきものあり甘き物あり。これらは皆法爾の道理なり。阿彌陀佛の本願は名號をもて罪惡の衆生を導かんと誓ひ給ひたれば、ただ一向に念佛だに申せば、佛の來迎（攝取）は法爾の道理にて疑なし。」

と示されているが、焰が空にのぼり水が下りさまに流れると同様、眞實の神あり佛ある以上、それは大智大悲の自然であり本願の自然である。西方過十萬億佛土が少しも問題にならず、この身このまゝこの場所で、攝取の照益を受け現在說法を聞くことができる。恰も天上の太陽や月や星との距離が私たちにとつて少しも問題にならないと同じく極樂は十萬億土遠しとするも完全に去此不遠であり、信仰上からも實際からも全く問題にならない。私達は今現實に佛の光攝をうけ慈育に接し、現在說法を聞いているのであつて、その證據が有難い念佛の聲である。

極樂の名

惠心僧都の「往生要集」に次の如き言葉がある。

「壽も亦無量なれば終に生老病死の苦無く、心事相應すれば愛別離の苦無く、慈眼を以て等しく視れば怨憎會の苦無く、白業の報なれば求不得の苦なく、金剛の身なれば五盛陰の苦無し。」

極樂の衆生に、衆の苦あることのない事情がよく説明されている。太陽既に西山に没し地上が太陽の熱氣を失えば地上の空氣も萬物も悉く活氣を失いたゞ眠る外はない。明朝再びこの地上が太陽の熱氣を受入れゝば萬物は悉く生々として活氣を呈するに到る。釋尊が大經に「我れ無量壽佛の光明威神の巍々殊妙なるを説くこと晝夜一劫すとも未だ盡すことあたはじ」と仰せられている如く、極樂は完全なる無量清淨光明土であり、その巍々殊妙なる威神光の中にはたゞ佛の無限の大智大悲のみが働いているのであるから生老病死のないことは勿論、その大生命の活動が無礙であり自在であり、全く貪欲、瞋恚、愚痴、惡意、邪見の働く餘地がなく、あるものすべてが善意、平和、健康、慈悲、智慧の活動だけである。すなわちその國の衆生には惡性を感ずる土地も家も衣服も食物も肉體もなく、もろ／＼の苦あるべき原因がないから、たゞもろ／＼の樂のみを受けて

いるのである。私達は念佛してこの經文を拜することによつて、別に努め勵まなくともその國の徳として自から苦惱せず、たゞもろゝの樂のみを受けられることが自然に理解されることであらう。而かもこのことは決して死後の問題ではなく、本經を讀誦しお念佛を唱えさして戴くことによつて現實に一步步その境地が功開されて來るのである。

依報莊嚴の種々相



一、寶行樹莊嚴

極樂の依報莊嚴の種々相は、無量壽經に明かされている四十八願の成就者、阿彌陀佛の廣大無邊なる佛徳の具現である。従つてそれは肉眼所見の世界ではなく念佛する者の上に具現する心眼の世界である。譬えばプリズムを通して見る太陽の光線の如きものであつて、そこに展開する絶大無限の美觀は現實的には説明することのできないものであ

る。またそれは娑婆即寂光土ということではない。娑婆は肉眼所見の世界であるが、寂光土は心眼所見の世界である。念佛して多少とも心眼が開かれなければ、淨土の種々相は理解することも説明することもできない。即ち稱名念佛する者だけがその少分を推察し理解し説明することができらるであらう。

畫家の視覺は非常に發達しているから、一般人の感受し得ない色や形の世界を持つてゐる。音樂家は聽覺が鋭敏であるから、素人には分らない音の世界をきいてゐる。念佛することによつて如來の眞實を知り、彌陀の光明中の我となつてみれば、松吹く風の音も七寶々樹の法音の調べ、入り日の麗しきを淨土莊嚴の種々相と觀することは、決して不思議でも不可能でもない。

寺院の内部に佛が現實に實在し、信徒の淨財を以つて建立せられた佛殿が、肉眼所見では一般の見るところと何等變りがなくとも、一度念佛して心眼に映する美觀は實に名狀すべからざるものがあるのである。それは樹林たると佛殿たるとを區別する必要はない。極樂の寶行樹は、法藏菩薩四十八願成就の結晶であり、全宇宙の善意を積み眞實を重ね、佛の無限の智慧と慈悲とによつて常に周匝し圍繞して日夜に育てられてゐるのであるから、必ずや瓦礫を變じて四寶となすこともできるであらう。

二、池閣蓮華莊嚴

佛の智慧は前述のように永い期間を通じて完全に成就された一切種智であり、無漏清淨業による佛力の具現であるから、惡を變じて善となし、瓦礫も惡素質を脱すれば金となすことができる。七寶の池といい八功德水というも決して不當でも不自然でもない。また金銀等によつて合成された樓閣ありということも、恐らく事實はそれ以上で普通の感覺や理性では説明出來ないことであるからこう説明する外はない。法藏菩薩は大悲誓願を發し、

「たとひ身を諸の苦毒の中に止むとも我が行は精進にして忍びて終に悔ひざらむ。」

と仰せられ、世自在王佛はこれに對し、

「譬ふれば大海の如きも一人舁量して劫數を經歷せば、なほ底を窮めて其の妙寶を得べし、人至心ありて精進に道を求めて止まずば、會^{かた}ず當に剋果すべし、いづれの願か得ざらむ。」

との眞證を得て、五劫の思惟と兆載永劫の苦修鍊行を経て本願を成就し、完全圓滿なる受用身となられたのである。そうして稱名念佛の電線を引き、大智大悲の電燈をつけて下さつた。唐の法照禪師の「五會法事讚」によると、

「此界一人念三佛名」 西方便有二蓮生」

とあり、此世で念佛する者が一人あれば極樂の寶池に一つの蓮華が生じ、この蓮華が生長して念佛者が往生すれば、必ず來つて迎えるという。實に意味深い尊いお言葉で原因があれば必ず結果があり、念佛の徳が即座に此土を莊嚴している許りでなく、當來すべき淨土をもまた日々莊嚴しているのである。こゝに日々に念佛する者の實に麗しいたゆまざる尊い姿がある。菩薩の淨佛國土成就衆生の大願が常に念佛する者によつて、現當を通じ、現實に成就されつゝある。また我等が實際に池をめぐらし家を建て蓮を植えて楽しむことができるのは、極樂淨土の莊嚴が成就されている結果ではないだらうか。私達は念佛して現實に佛の^レ大智大悲を離れて生活することのできないことを知らなければならぬ。すなわち我等は今現に佛の^レ大智大悲を受取つて生活しているのである。

三、金地樂華莊嚴

七寶莊嚴の淨土といい、黄金を地となすというも必ずしも一定しているのではなく、大經に「七寶爲^レ地」とあり、觀經に「瑠璃爲^レ地」とある通りで、合成が自然である。極樂淨土であるからといつて自然を全く離れて仕舞つては往生することも還相することもできないであらう。すなわちそれは凡入報土ではなく完全にこの世から絶縁された淨土

ということになる。晝夜六時といふ、清旦といい、華宮に華を盛つて諸佛に供養し飯食經行するといふ人間生活そのものであり自然である。

華嚴經には一即一切、一切即一であると説き、一微塵の中に淨も釋もその他ありとあらゆる一切が内包されているというが、そこに大自然の本質がある。従つてこの大自然の本質ほど廣大無邊なものはなく、美しいものはない。美と愛の無盡の寶庫であるといふことができる。即ち華嚴三昧海中の蓮華藏世界、法華三昧中所見の寂光淨土がそれであり、極樂淨土もまた恐らくそれであるに相違ない。なぜなら大自然の本質そのものに二三あるべき道理がないと同様、人類が最後に到達すべき道理がないからである。かくてこそ人は受け難き人身を受け得たことを安んじて平等によろこぶことができる。

四、花鳥風樹莊嚴

五根、——信、精進、念、定、慧、

五力、——五根に惡を破る力ができたことをいう

七菩提分——七覺支ともいう。擇法、精進、輕安、念、捨、

定、喜、

八聖道分——八正道ともいう。正見、正思惟、正語、正業、

正命、正精進、正念、正定、

三、惡趣——地獄、餓鬼、畜生、

以上によつて極樂が單なる「ごくらく」でないことが理解されるだろう。こゝでは鳥や風の聲が、尊い佛法を演説していることが明かにされている。舍利弗よ!!極樂國土には種々不思議なる雜色の鳥がいる。白鵠、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽、共命の鳥などであつてその中には現實にはみられない鳥の名もある。此等の鳥は晝夜それ／＼三度づつやさしい聲をだして鳴き、佛道修行に必要な尊い法である、五根、五力、七菩提分、八聖道分の意を囀つてゐる。従つて極樂淨土の衆生はこの聲をきいて佛法僧の三寶を尊ぶ心を生ずるのだ。舍利弗よ!!これらの鳥は娑婆世界のそれのように罪の報によつて生れたものではない。なぜなら極樂に三惡道がないからだ。すなわちかの國には地獄、餓鬼、畜生の名さえないから、もとよりその實がない。これは大經に説かれている四十八願成就の結果で、佛が尊い法の聲をきかしめたいと思われる智慧と慈悲の具現であり、所作である。

舍利弗よ!!極樂國土には此外に風がまた尊い法の聲をおこしている。その風は微かに吹いて、疾からず遅からず、もろ／＼の寶行樹及び寶羅網を動かして微妙の聲を出すのである。そのさまは譬えば百千種の樂を同時に俱に作すようであり、この音をきく者は自然に三寶の德を念う心が湧い

て来る。舍利弗よ!!かの國には自からこのような不可思議な徳が具つてゐるのだ。

右が本經に於ける依報莊嚴の種々相の大體で、大經、觀經を拜讀すれば更らにその詳細を知ることが出来る。私達の肉眼所見である現實世界はその表面だけで非常に廣いようでもホンノ一部分で、極めて狭少でしかないが、これに對しその本質である眞實界は實に廣大無邊であり、大智大悲であり、無限絶對である。その無限絶對にして無始無終である大智大悲の眞實界が、長い／＼年月の間をへて一人格に具現され、言葉となし所作となり、完全に受用することが出来るに到つたもので、それが彌陀であり淨土であると考えられる。而かもそれが自然に人格となり佛格となるところに、大自然の本質があるのであり、その人格の中で佛格が育てられたのである。法藏菩薩が本願を成就するための思惟といふ、苦修鍊行というのがそれであつて、かくして菩薩の正報生命が集積し、十方衆生が如何程受用しても盡きない、一切衆生を慈育し給う佛の大智大悲の泉となつたのではないだろうか、なぜなら私たちはいま現に御本願のまゝに念佛して佛の無限の大智大悲を知り、且つそれを受用させて戴いているからである。(未完)

淨土の會員を一人でも多く

◆どなたでも會員になれます。

◆會費は半年二〇〇圓、年額四〇〇圓です。

◆會員には毎月淨土を配布します。

◆この會は皆様の會ですからその發展の爲に、お一人でも多くの會員をつくつて、正しい信仰運動をひろめましょう。お知合いの方々にぜひおすすめ下さい。

◆お申込は振替(東京八二一八七番)を御利用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰會

編集後記

○限りない情熱を思わせる太陽の季節である。この夏はユガめられることなく純粋な太陽の季節をのぞみたい。

○夏の空の入道雲の逞しさは動的なものを感じさせ、紺碧の海の深さは静的なものを覚えさせる、その動と静なるものを宇宙は内包し圓滿に調和している。

○最近、創價學會の行動が厳しい世間の批判を浴びている。當然のことだと思ふ。眞摯に宗教を求め、ものとしてそこに圓滿さも謙虚さも、態度の上に徹底も感ぜられないからだ。心すべきことである。

○そのことは佛教者自身もいえることである。われわれに向けられた世間の酷評に對しても、虚心にその忠言に耳を傾けなければならぬ。

○去る、六月廿二、三の兩日、京都華頂短大において行われた教學

大會は仲々のにぎわい。

○その折、中外の高橋良和氏に會ひしたが、淨土のこととわがことの如くに心配していただいているのには感激している。

○廿四日に京都家政學園と、和歌山市での淨土の集いは盛況だった。このよう會が回を重ねてもたれることが何より淨土發展のため

にのぞましいことと思ふ(宮林)
○連日の暑さの中にも、各地の皆様、お元氣のことと存じます。汗して働く暑熱の日々の中にこそみのり豊かな秋が約束されて行きます。

○法のみ、のりを求めて、この十九日より八月七日迄、教師養成講座が宗務所講堂で開かれる。

○講師には、佐藤密雄、佐藤良智の本會關係の兩先生の外に、大野法道、阿川貫達、中野隆元、小澤勇貫、八百谷孝保、戸松啓眞、の諸先生が出席される。

○先月號の大人の童話「芋堀權助の話」に次いで、本號には小説

「苔」を掲載させていただいた石川忠正氏は、宮城の専與寺奥山清賢師の御紹介による方で、日本農民文學會に所屬する作家で、佛教を理解し、今後佛教小説にも手をそめたい希望を持つておられるとのこと。

○六回に亘り連載いたしました春日井眞也師の、インド風物詩的なものの中に、インド思想を根底に表現された「滯印日記」は今月で終ります。

○青森教區宗祖法然上人七百五十年御忌事務局では、その記念事業の一つとして、東奥念佛の始祖である「金光上人物語」を刊行された。同著は金光上人の御生涯を史實、各地の傳説にもとづいて、スライド解説として書下したもので、物語としての筋を保つて一冊にまとめられた一般檀信徒にも理解できるものとして推奨致します。

尙同著は、本會又は事務局にて取扱つております。(價三十四、送料八圓)(水谷)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手數料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「淨土」七月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十三年六月廿五日印刷
昭和三十三年七月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹中 信常

發行人 佐藤 密雄

印刷人 春山治部左衛門

東京都品川区田代町三ノ十

印刷所 共立社印刷所

東京都品川区上大崎一ノ七八三

發行所 法然上人遺仰會

電話 東京八二一八七番

若い世代の人々のために！！

幼児教育に専心する方々へ！！

指導外語教授増谷文雄 畫中村ひろし
監修東大、大正講師
教直法然さま
（定價）三〇圓（十部以上二八圓）
（十部以上二八圓）

者 浄土門主 岸 信宏 親下
浄土大學長 増上寺法主 椎尾辨匡大僧正
知恩院執事長 香月善裕師
浄土宗務長 渡邊眞海師

この本は繪ときをもつて、わが宗祖、法然上人の御生涯と御教旨を、少年少女に、わかりやすく、かつ親しみやすく描き出したものであります。しかも、その内容は、國寶「勅修御傳」によつたものであります。

大正大學教授

竹中信常著

宗教心理の研究

定價二二〇〇圓 五九〇頁
（十部以上二八圓）

宗教が現代人の心理にどのように受けとられてゐるかという
ことを、古來の學說史に即して説明すると共に、信仰の心理
靈感の心理、宗教心等をテーマとしてとり上げてゐる。宗教を
理解し、信仰を他に傳へんとする者にとつて必讀の書である。

東京都中央區京橋二の一（鹽山ビル）

發行所

青山書院

振替東京 九九三〇三番

東京都品川區上大崎二丁目七八二

法然上人鑽仰會

振替東京 八二一八七番

取扱

取

法然上人鑽仰會

振替東京 八二一八七番

値段改正中 材料値上りの爲お値段は下記の一・二割高です

額ブランコ2人乗	¥ 13,000
額ブランコ3人乗	¥ 15,000
額ブランコ4人乗	¥ 22,000
額ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達費（都内横濱 500 圓以内
其他 1000 圓以内）組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、（荷造費當社・送料着拂）

組立説明書送付



篠澤鐵工所
東京都大田區堤方町 7 1 8
電(75) 1024 (池上驛東3分)

幼稚園 運動遊具
全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのぞ
ットで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
答・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。